CONCEPT BOOK

THE HEART OF HARVEST

ハーベスト医療福祉専門学校

発刊に寄せて

１９２１（大正10）年、校祖 摺河静男先生が、姫路の地に兵庫県播磨高等学校を設立されて以来、九十余年にわたり、学校法人摺河学園は、一貫して「建学の精神」を具現化すべく、教育の道一筋に力を尽くし今日に至っています。同校は、「心の教育」に重点を置き、地域にあって最も信頼される学校として、日々活気溢れる教育活動を展開してきました。

ハーベスト医療福祉専門学校は、この兵庫県播磨高等学校の創立八十五周年記念事業の一環として、摺河学園の伝統と実績をしっかりと引き継ぎ、さらに深化・発展させるべく、２００８（平成20）年に開校しました。以来、「形から入って心を育てる」という考え方に基づく「心の教育」のもと、充実した施設・設備、優れた教員陣によって、医療福祉の分野において優秀なスペシャリストを育成し、国家資格試験の合格率や就職率でも素晴らしい成果をあげてきました。

〝命と向き合う職場〟ともいえる医療福祉の現場では、今後、「人と人」との関係を良好に保ち、「心と心」をつなぐことが一段と強く求められます。また、高度な専門的知識と技術をしっかりと身につけ、常に向上心をもって継続して努力していく姿勢が不可欠となっていくでしょう。そのなかで本校は、対象者に対して、心を込めて真摯に接することができる、心と技を兼ね備えた信頼されるプロフェッショナルを育んでいくことを目的として、あらゆる教育活動に取り組んでいます。

本校は、これからも一人ひとりの学生としっかりと向き合いながら、「心の教育」の深化・発展にこれまで以上に努めることにより、地域社会が求める人材を輩出し続け、地域そして日本をあるべき姿へと導く役割の一端を担っていきたい、と改めて意を強くしております。

ハーベスト医療福祉専門学校 校長　杉本健三

目次

教育の理想像 …… 02

育てたい人間像 …… 06
- 育てたい人間像 …… 06
- 育てたい理学療法士 …… 08
- 育てたい介護福祉士 …… 12
- 育てたい保育士 …… 16
- 育てたい登録販売者 …… 20

大切にしていること …… 24
- 心の教育 …… 24
- 現場主義・実践主義 …… 28
- 師弟同行 …… 32
- 「希望の職場」実現 …… 36
- 地域との信頼構築 …… 40
- 仲間と共に …… 42
- 帰れる場所 …… 44

未来への決意 …… 46

ハーベスト生は どう学んでいるのか …… 48

資料編 …… 52
- 7年間の足跡 …… 52
- DATA …… 54

教育の理想像

本校がめざす教育

私学にはどの学校にも「建学の精神」があり、それぞれが独自の教育を行っています。「建学の精神」は、私学の創立者が次代を担う人材の育成を願い、学校開設に当たって、その理念と気概を謳いあげたものです。いわば、それぞれの学校がめざす教育の〝普遍的な理想像〟とも呼べるものです。

もちろん、ハーベスト医療福祉専門学校にもめざすべき理想像があります。それは、本校の運営母体である学校法人摺河学園の創立者である摺河静男が掲げた兵庫県播磨高等学校の「建学の精神」を受け継ぎ、さらに進化・発展させようとするものです。

地域社会と時代の要求に応じ、
医療・福祉の領域を中心として、
あるべき日本社会を構築するとともに、
望ましい人間生活を創造しうる人材を育成する。

なぜ医療福祉の専門学校か

摺河学園では、1921（大正10）年の兵庫県播磨高等学校の創立以来、一貫して「心の教育」に力を注ぎ、地域を担う優秀な人材の育成に努めることにより、地域社会の発展に貢献することをめざしてきました。

しかし、現在の日本社会は、行き過ぎた市場至上主義に基づく価値観のもと、自分さえよければそれでいい、汗を流さずとも儲かればいいといった風潮に流され、日本人が伝統的に持っていた「心」を失いつつあると感じています。日本人の美徳であった「誠実さ」や「勤勉性」を否定するかのような出来事も頻出しています。

とくに、医療福祉の分野では、少子高齢化が一段と進行しているにもかかわらず、危機的な国家財政という制約のなか、サービスの低下や人材難が深刻化しつつあります。一方で、「人の役に立ちたい」「社会のためになりたい」といった志を持つ若者たちが、将来の夢を描きにくい状況にあるのが今日の社会であるように思います。

このままでは、日本の医療福祉は立ち行かなくなる――摺河学園では、こうした危機意識のもと、この分野において、決して失ってはいけない姿勢を大切に守り育てることが、急務であり使命でもある、と考えました。これが、本校の設立に至った最大の動機です。

「校訓」が意味するもの

本校がめざす教育のあり方と、育てたい人間像は、三つの「校訓」に示されています。

誠実

他人や仕事などに対して、真面目に、偽りのない姿勢で取り組むこと。相手のことを考え、真心を込めてことにあたること。

敬愛

誰に対しても大きな愛情と謙虚な姿勢で接し、一方で自らを厳しく律することのできる無私無欲の人間であること。

礼節

人を愛し、大切にするという豊かな人間性を発露させること。すべての人間、物事に感謝の気持ちをもって対すること。

これらは相互に補い合うものとして存在し、三つを併せ持つ人間の育成が、本校における教育の基本となるものです。いずれも日本人が長年にわたって継承してきた美徳であり、〝日本人のアイデンティティ〟と言い換えることもできます。しかし近年、グローバル化の波が押し寄せ、合理主義・個人主義の側面を際立たせることに伴って、これらの日本人の美徳は急速に失われつつあります。

こうした時代にあって、医療福祉の現場では、改めてその「質」が問われるようになってきています。そして、医療福祉の分野だからこそ、相手を思い、真心を込めて接する「誠実」、何ごとにも大きな愛情と謙虚な姿勢で臨む「敬愛」、すべての人や物事に感謝の気持ちを込める「礼節」――が求められており、そのどれか一つでも欠けることがあってはならない、と本校は考えているのです。

理念の実現に向けた実践

一般的に見て、学校の理念は、掲げた後にその内容への意識が希薄になってしまうケースが往々にしてあります。しかし本校は、「建学の精神」や「校訓」といった基本理念は、それらの実現に向けた具体的な実践があって、初めて意味を成すものであると考えています。理念は、実践しなければ掲げる意味がない、とも思っています。

理念を実践する本校の取り組みとしては、「形から入って心を育てる」という考え方に基づく「心の教育」の展開が挙げられます。具体的には、相手を思うやさしい心を顕在化させ、形として相手に届けるために、立ち居振る舞いや言葉遣いを含めた礼儀作法を学びます。さらに、いずれの学科においても、医療福祉の専門的な知識・技術を学ぶ土台として、相手の気持ちを想像する・相手の立場に立とうとする姿勢そのものを学ぶことから学習を始めます。

教職員による率先垂範

また、「建学の精神」や「校訓」に掲げる理想の人間像を、教職員が学校の内外において、個人の振る舞いを通した実践例として、さまざまな形で体現しています。

例えば、それぞれの現場で求められる「一人ひとりに誠実に接する姿勢」を、まず教職員が学生一人ひとりへの対応において実践しています。学生一人ひとりに対して、価値観・考え方・置かれた状況・背景などを受け容れ、尊重したうえで、大きな愛情をもって接することを、すべての教職員の基本的な姿勢とし、そうした対応が、心を通じ合う関係を結ぶことの始まりであることを、学生たちに伝えたいと考えているのです。

同時に、「心の教育」の考え方に基づく礼節の実践も、教職員の姿を通じてその意味を伝えることができるよう、教職員全員で徹底して行っています。

理想像を描き、理念を掲げ、日々のなかでその実践に心を尽くすこと。その姿勢が、自らがめざすべき姿へと着実に近づくための唯一の方法であることを、本校は、自らを通して伝えたいと思っています。

育てたい人間像

品位ある人格がすべての原点

「一人ひとりを尊重する姿勢が群を抜いている」

ハーベスト医療福祉専門学校の卒業生について、就職先から、こうした意味の言葉をしばしば言っていただきます。本校はこの評価を、人と人との温かいつながりを大切にし、何ごとにも心を込めて取り組める専門家の育成に力を注いできたことの結果として受け取っています。

本校の運営母体である学校法人摺河学園は、「心の優秀さを引き出す教育」をすべての教育の根幹としてきました。品位ある人格の上にこそ、勉学における優秀さが成り立つ、という考え方によるものです。そして、この原点は、本校においても変わりません。

実学を追求する専門学校である以上、確かな知識と技術を身につけることは当然です。しかし本校はそれらを、手段と位置づけています。一人ひとりに対し、常に思いやりの気持ちを持ち、その人の立場に立って最善を尽くす。そのことを実現したいから、手段である知識と技術を真剣に学ぶ。それが、本校のめざす専門教育です。

まず〝一流の社会人〟であれ

対象者に最大限の対応を行う「目的」を実践するために、本校は、専門家である前に、一流の社会人であることを大切に考えています。人を相手にして成り立つ医療福祉の分野では、すべての対応が、まず相手に受け容れられることから始まります。多くの人は、信頼できない相手に自分の人生の一端を預けていいとは思わないし、豊富な知識や高度な技術は、受け容れられた上でしか役立ないからです。

そして、信頼できる人間性は、多くの人々の一般的な感覚によって判断されます。だからこそ、本校は礼儀作法・立ち居振る舞い・言葉遣いや、社会で必要な常識・マナーについての教育を徹底しています。この取り組みは、一つの授業内にとどまらず、学校生活全般できめ細やかに実践されています。

飽くなき向上心と柔軟な適応力

一方で本校は、すべての相手に「心」で対応する人間を育てることを、最重視しています。相手のことを徹底的に思う「心」が、知識や技術を身につけたいという強い動機につながるからです。

同時に、「飽くなき向上心」と「柔軟な適応力」も大切にしたいと考えています。医療福祉の分野で一流と呼ばれる人たちの多くが、誰からも受け容れられるのは、経験を積むなかで自身が成長した結果にほかなりません。また、絶えず変化する社会で、知識や技術を磨き続けるためには、「相手の特性を踏まえ、臨機応変に自分で考え行動できる力」が求められます。

医療福祉の分野で、「心」と「知識・技術」を兼ね備えた品位ある人材を育む――この目標を実現することで、「地域社会に不可欠な学校」として、その発展に寄与していきたい、本校はそう考えています。

育てたい理学療法士

チームで行われる医療のリーダー的役割を担い、現場をあるべき方向へと導くことのできる理学療法士を育てることをめざしています。

「思い」に向き合う

日本ではここ数年、怪我や病気などによって障がいを持つ人々に対して、一方的に差し出す〝与える医療〟ではなく、心を通い合わせながら共に歩む〝支える医療〟が求められるようになってきました。理学療法士は、その中心的な役割を担う専門職と言えます。

本校の理学療法学科は、向き合う相手の状況・変化に「気づく」力を持つ理学療法士を育てることを、大切に考えています。一人の患者さんを前に、抱えた思いを理解しようと一生懸命になり、わずかな変化を見逃さず、会話以外のしぐさや表情から心情を推し量ろうと努める。そうした姿勢で現場に臨むことのできる人材の育成に、本校は力を注いでいます。

理学療法の現場で向き合う対象者は、年齢や、病気・障がいの種類がさまざまで、置かれた状況もそれぞれ異なります。突然の疾患や事故によって、身体の一部が正常に機能しなくなったことで、絶望感に打ちのめされ、リハビリテーションに前向きに臨むことの難しい患者さんも少なくはありません。

そうした時に、理学療法士が、相手の立場に立とうとし、その痛みを自分のものとして感じようとし、相手を理解しようと必死になる。その上で相手に合った対応を模索し、やさしい気持ちで臨む。そして、共に克服しようとする。その姿勢そのものが、患者さんの気持ちを支えます。だからこそ、本校はそうした心のあり方を、何よりも大切に捉えています。

対象者の問題を見定める洞察力と、共に回復を目指す心とを、バランス良く身につけることで、本当の意味で「相手に向き合う」ことのできる理学療法士として羽ばたくことができると考えているからです。

オーダーメイドを提案するために

一方で、専門職として確かな知識や技術は不可欠な要素です。ですが、これらは、相手にとってのベストをもたらすための手段であって、その習得が目的であるわけではありません。また、知識や技術の使い方は、患者さん一人ひとりによってそれぞれ異なり、汎用性のある正解が存在するわけではありません。それだけに、まず相手のことを一生懸命に考え、何を求めているのかを理解する。その上で、その人の生活を向上させる提案を行うということが大切になるのです。

知識や技術は単体に存在する限り、大きな力を発揮しません。あらゆる知識と技術を組み合わせ、応用しながら、相手にとってのオーダーメイドを提案する。それが、理学療法士にとって、きわめて大切な姿勢だと本校は考えています。

思いに向き合い、共に歩む医療は、「心」と「知識・技術」の両方を持ち併せた上で、知識・技術を深いところまで理解・把握し、それらを相手のために活かせて、初めて実現できるのです。

〝飽くなき向上心〟が切り拓く道

理学療法の現場においては、「もっと技術が高かったら治せたかもしれない」「自分の力が足りないばかりに」など、無念な思いにぶつかる場面は決して少なくありません。

本校理学療法学科の教員の一人は、患者さんの「担当を替えてほしい」という要望を間接的に聞かされたことがあり、自分の無力さを痛感したという経験を持っています。こうした場面に直面した時、重要となるのは、「次」に活かす上で何ができるか、を考える力です。

それでも患者さんにとってのベストを探したい、と前に進み続けるために必要なのは、悔やむ気持ちではなく、悔しさをエネルギーに変えて、同じあやまりをくりかえさない強い意志です。

本校では、自分の行ったことをきちんと振り返り、そのなかから具体的な課題点を見出し、次の機会に結びつける習慣を、すべての学生が身につけられるように工夫を行っています。実習や演習、ふだんの授業といったさまざまな学習の機会に、正解を導き出せない状況下において、決して妥協せずに答えを追求する姿勢そのものを、本校は高く評価します。

また、理学療法の分野では技術の進歩・発展が目覚ましく、先端技術は常に新しいものへと更新されます。こうした日進月歩の世界にあって、決して現状に満足し、立ち止まることなく、さらなる知識・技術の吸収に向けて最大限の努力を注ぐ向上心も、きわめて大切なものです。知識や技術を、ひいては自分自身をもっともっと高めていきたいと願う飽くなき向上心を、高めていける教育現場であることも、本校の役割と捉えています。

生活のクリエイターとして

本校の理学療法学科が大切にしているもうひとつのことが、自分で考え、自分で行動する姿勢です。

理学療法士の仕事は、患者さんの症状を治癒・軽減させることのみにとどまるものではありません。

「患者さんの内面を理解し、思いと向き合った上で、これからの生活を創造していく力が求められる。新しい生活のイメージを描き、仮説を立て、そこへ向かう。そうしたクリエイティブな能力が必要なところが、理学療法士という仕事のひとつの特徴です」（理学療法学科・北浜伸介学科長）

例えば、「肩が上がらず生活していく上で困っている」相手に対して、仮にすぐに治すことができなくても、今よりも快適な生活を創造するための模索を行うことは可能です。悩みのひとつが、洗濯物を干すことができないことであれば、干し方を工夫したり、安全な踏み台を用意したりすることを提案する。歩けなくなった患者さんが、一人で自宅で生活していくために、生活スタイルを新しい発想で考え直し、「○○の部分をこうしていけば△△ができるようになる」というような提案を行う。その提案の実践が困難であれば、さまざまな社会資源を活用しながら補う方法を考える。

それぞれの相手の状況に合わせて、妥協せずベストの答えに向かって道を切り拓いていく姿勢、それが、本校が育てたい理学療法士の基本です。

地域社会の明日を創る

患者さん一人ひとりの「思い」にしっかりと向き合い、知識と技術を総動員した上で、相手にとってのオーダーメイドを提案する。どんな場面にあっても妥協せず、答えを追求する姿勢を持ち続ける。こうした理学療法士が増え、先頭を行くリーダー的な意識を持ってチームを導いていくことで、地域の医療福祉の現場は、あるべき姿を描くことができます。

そして、そうした意識を持つ理学療法士が増えていくことで、向かうべき方向へ近づいていくことができる。そうした未来を担うひとりを、本校は育てていきたいと考えています。

理学療法士は長いあいだ人材不足の状況にありました。しかし、高齢化社会が到来し、社会保障が大きな課題となるなかで、平成12（2000）年以降、養成校開設の規制緩和を受けて養成校が急増し、理学療法士の人数は平成24年に10万人（平成14年は3万3415人）を超えました。

そして今後も、毎年1万人の理学療法士が増えることが予想されます。そうした状況下にあって、資格を有するだけでなく、「プラスαの力」が大切になります。

本校は、現場での実践能力に加え、自分で考え、さまざまな要素をマネジメントしていける力こそが、理学療法士が新たな活躍する領域を切り拓き、明日を創ると考えています。

育てたい介護福祉士

介護施設に就職した卒業生の現場風景。「ひとりを尊重する姿勢」をいくつも重ねながら、ハーベストの卒業生たちは誰からも信頼される介護福祉士を志しています。

日常の最も近くにある仕事

ハーベスト医療福祉専門学校の介護福祉学科は、相手の人生が心豊かなものであることを常に願いながら、その人生を共に歩くことのできる人間を育てたいと考えています。

介護福祉士の仕事は、高齢者・障がい者の生活をサポートすることです。高齢者・障がい者の周囲には、たくさんの仕事があります。疾患や外傷を治癒させる仕事があり、その治癒プロセスを医療に関するそれぞれの専門分野から支えている仕事がある。そのいくつもの仕事のなかで、高齢者・障がい者の日常生活の、最も近い場所にいるのが介護福祉士です。

人の人生は、大部分が日常生活から成り立っています。日常生活を心豊かに過ごすことができれば、その人生は心豊かなものであるといえる。本校はそう考えています。だからこそ、自らの仕事を通して、相手の人生を、どうすればもっと心豊かなものにすることができるのか、という問いに、心を砕いて応えようとする姿勢を持つ介護福祉士を育てたいと考えているのです。

安全性と快適さという基本

高齢者・障がい者の「安全」と「快適」に心を尽くすことは、介護福祉士に求められる基本的な姿勢であると考えています。食事、入浴、排泄、衣服の着脱などのサポート、車椅子への移乗・移動補助、歩行補助に加えて、ベッドのメイキング、部屋の清掃など、介護福祉士の仕事の種類は多岐にわたりますが、そのすべてに、安全を守るための確かな知識・技術および迅速な状況判断と、心地良さを実現するための真心が必要です。本校は安全と快適を確実に提供できる介護福祉士としての基本づくりに、徹底して時間をかけています。

介護に関する専門知識を学ぶ授業に加えて、実習にも力を入れ、とくに実習の事前・事後の指導を徹底しているのは特徴のひとつです。介護福祉学科の学生たちの就職先には、さまざまな種類の施設があります。老人保健施設、特別養護老人ホーム、デイサービス施設、障がい者養護施設・支援施設などが代表的なもので、それぞれの施設において介護福祉士に求められるものは少しずつ異なります。ひとつではない正解を、ひとつずつ体験し、ひとつずつ確認しながら身につけていくためには、実習の効果を最大限に高める工夫が必要です。

納得して受けることのできる介護を

介護福祉士が向くべき相手は、高齢者・障がい者だけではありません。介護の現場では、対象者とそのご家族が、現在の状況に納得して日々を送ることが不可欠です。だからこそ、納得につながる根拠を、本人と家族の日常の最も近くにいる介護福祉士が持つことが、大切になるのです。

講義カリキュラムには、医学の基本を学ぶ「医学一般」を充実させる一方で、「リハビリテーション論」も

多くのコマ数を設けています。医学および理学療法の知識を取り入れることで、日々の介護に「自立支援」の発想をプラスすることができるからです。こうした介護のことを、根拠に基づいたケア、と本校では呼んでいます。

心豊かに生きることを支える

「安全」と「快適」を約束されてさえいれば、人は幸せだろうか。その内面は豊かだろうか。それは、介護福祉士としての経験が豊富な教員の多い介護福祉学科が、今日の現場に対して、未来の介護福祉士である学生たちに対して、日々問いかけていることです。

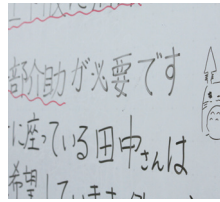
自立して生活していける私たちにとって、安全と快適は、最低限の基本です。基本の上に、自分にこそ与えられた役割（職業や責務）と、自分だからこそ見つけられた楽しみ（趣味やエンターテインメント）が加わって、それらにプラスの力をもらうことができるから、人は楽しんで生きていくことができる。高齢者・障がい者にとっても同じです。

介護の対象となる一人ひとりが、自分が自分であることをより楽しみながら生きていくことのできる介護現場を増やしていきたい。そう考えた本校は、２００８（平成20）年の開校から、高齢者・障がい者の心に豊かさを届けるための取り組みを、授業として導入しています。

生きる楽しさを届けたい

そのひとつが、音楽を楽しむことを通じて心身の活性化を図る「シルバーリトミック」です。幼児教育に用いられるリトミックを高齢者向けにアレンジしたもので、心身の記憶を呼び戻し、前向きな気持ちを育む効果が期待できます。また「ブックトーク」は、介護現場でこれまで多く行われてきた朗読やストーリーテリングの要素に加えて、人が自ら本へ向かうきっかけをつくる取り組みです。

さらに、手のぬくもりを通じてリラックスする、他者の目に映る姿を意識する、季節の移ろいを楽しむといった「プラスαの価値」を、対象者の日常に届ける「ライフケア」（従来の「やすらぎケア」を発展）の授業も実施しています。この取り組みには、対象者と豊かなコミュニケーションを図ろうとする気持ちを後押しする技術を身につける目的もあります。



安全と快適だけでは足りない。高齢者・障がい者が日常の生活を楽しいと感じられることが大切であり、そのことを支えられる現場でなければならない。本校は、こうした取り組みに、介護現場を担う一員としての意識を育むことをもめざしてきました。

授業単位として認定されるものだった「やすらぎケア」は、２０１４（平成26）年度から、「ライフケア検定」（一般社団法人ライフケア検定協会認定）として形を変えていきます。身体にはたらきかける「フィジカルケア」と、心にはたらきかける「メンタルケア」によって構成され、高齢者・障がい者の心にさまざまな意味での「豊かさ」を届けられる介護福祉士を育むための検定です。

信頼に足る人物に

確かな知識と技術、冷静な判断力と柔軟性、相手の心豊かな人生を共に追求しようとする心が、高齢者・障がい者の心に届くために、大切なことがあります。

それが、人間性です。人間性は目に見えるものではありません。それでも、介護福祉士たちは、初対面の高齢者・障がい者やそのご家族に、自分のことを「信頼に足る人物だ」と思ってもらわなければなりません。

本校が、言葉遣い・立ち居振る舞いを含む礼儀作法を徹底して指導するのは、それぞれが持つ人間性を、目に見えるものとして相手に示すためです。例えば「敬語」は年長者を敬う姿勢を、「きちんとした服装」は出会えたことへの喜びを、ていねいな仕草は相手への思いやりを伝えます。形が伝達してくれるメッセージが、相手の心のなかで信頼へと変わるのです。

前述したプラスαのケアを学ぶ授業は、「高齢者・障がい者⇕介護者間」のコミュニケーションの入り口となることを期して取り組んでいるものでもあります。介護福祉士としての共通した素養を備えた学生たちにも、個性があり、それぞれの得意・不得意があります。だからこそ、相手と豊かなコミュニケーションを築いていくためのきっかけになり得るものを、本校はひとつでも多く提案したいと思っています。また、学ぶプロセスを通して、相手のすべてに心を配り、どう感じているだろう、どんなふうに変わっただろう、次にしてほしいことはなんだろう――と考えることが、学生個々の、介護福祉士としての資質をより高めてくれると考えているのです。

超高齢社会を迎えている今日の日本で、介護福祉の現場は、さまざまな面から変化しようとしています。そのなかで働く介護福祉士にとって、大切なことがふたつあると本校は考えています。ひとつは、人を思い、人の幸せを願うやさしい気持ちを、いつも持ち続けていられる心です。もうひとつが、「どうしたら今よりもっと良くなるだろう」という向上心を持って、新しい考え方やケアに取り組んでいく姿勢です。このふたつを携え、他者からの信頼と期待を受けとめることのできる人間性を通して、未来の介護福祉の現場を支えるひとりになることを、すべての学生たちに願っています。

育てたい保育士

姉妹施設「岡本ハーベスト保育園」で、授業で学んだ「ストーリーテリング」を実践。子どもたちの幸せな未来を願う、という原点を、実習は教えてくれます。

分かち合う存在になるために

ハーベスト医療福祉専門学校のリトミック保育学科には、めざす保育士像があります。

女性の社会進出が進み、また離婚の増加によって子どもをひとりで育てるお父さんお母さんも少なくはありません。こうした時代を背景に、保育園（所）は、仕事で家を空ける保護者に「代わって」子どもの面倒を見る役割から、保護者と共に子育てにかかわる役割への変化を求められていると本校は捉えています。であれば、保育士は、子どもの成長に関するすべてを分かち合う存在でありたい。保護者の喜びを倍にし、不安・悩み・さみしさを半減させることのできる存在にならなければいけないと考えています。

保護者が願うのは、子どもの幸せな未来です。たくさんの人とかかわり、人を愛し、人に愛される心豊かな人間になってほしい。その願いを共有し、そうした未来へ向かう成長の過程に何が必要であるのかを、自らの知識・技術を総動員して一生懸命考えることのできる保育士を、本校は育てたいと思っています。

リトミックを取り入れる理由

子どもたちの未来を見つめる上で、大切なもののひとつは、「感じる心を育むこと」であると考えています。そしてそのために、まず保育士が、日々の出来事や未知のものに対して驚いたり喜んだりする感性を、意識して育むことが重要だと本校は捉えています。

幼児教育において有効とされる「リトミック」を、カリキュラムに取り入れているのは、保育士たちの感性と表現力を育むことを大切に考えているからです。

リトミックは、20世紀初頭にスイスで生まれた音楽教育法です。音楽（音とリズム）を「感じる」と、身体が自然に動くという誰もが持つ力を活かして、身体、感性、知性のバランスがとれた〝育ち〟を支援します。

本校では、日本におけるリトミック教育の第一人者・辻裕氏が指導を行っています。音楽の持つ力を使い、子どもたちの成長過程における心と身体に刺激を与え、人として「大切なもの」を育てる保育・教育法の習得をめざしています。

具体的には、主に「ティーチング」（＝ロールプレイ）形式を採り、先生役と子ども役に分かれて実践しながら、リトミックの手法を学びます。そして、在学中に「幼稚園・保育園のためのリトミック1級・2級指導資格」（リトミック研究センター認定資格）の取得をめざします。働き始めてからこの資格取得にチャレンジする保育士が多いなかで、就職する時点で取得できていることは、学生たちの大きな自信となっているようです。

命の重さを知る授業

子どもたちに必要な「感じる心」を、まず学生たちに。その考え方に基づく教育は、リトミックだけではありません。かつての時代にくらべて、野山が減り、子ど

もたちが外で遊ぶ機会そのものも減少している現代において、子どもたちが自然に触れる機会は必然的に少なくなっています。このことは、現在の多くの学生たちにも共通しています。

虫や木や草花を含むたくさんの動植物の存在を知り、自然の営みのなかで自分が生かされていることに気づくことは、命の尊さを理解する人間になるために不可欠です。「自然保育」では、植物や野菜を種から育て、観賞したり収穫したりして、それらが枯れてまた種になるまでを体験します。また、機会によって学内で虫や魚を育てることもあり、こうした教育を通じて、命への畏敬と、命の終わりに直面した際の心の動きをも学んでいます。

絵本やおはなしの世界を楽しむ力

絵本を楽しみ、語られるおはなしに耳を傾け、「感じる」機会を持つことは、子どもの時期にとても大切なことです。絵本の読み聞かせは、多くの保育現場で行われていますが、本校は、子どもが絵本を楽しむことの重要性を、保育士が十分に理解し、より良く読み聞かせを行える力を身につけることが必要だと考えています。

このため本校では、保育士として、おはなしを語ることができることをめざして、「ストーリーテリング」を学ぶ授業を採り入れています。保育士自身が、絵本を楽しみ、おはなしを語ることを楽しめる力を育む学びを重ねるなかで、絵本に対する心の眼が開かれ、言葉への感覚を養い、語り伝えることの大切さと喜びを習得していきます。

そして、その力が、保育の現場で常に子どもの目を見て話しかけること、子どもの言葉にしっかりと耳を傾けること、子どもと想像の世界を共有することへとつながっていくのです。本校が「ストーリーテリング」を導入しているのは、そのことを確信しているためです。

初心者でも安心の〝完全個人レッスン〟

保育士をめざして確かな知識・技術を修得していくために、「不安」を「自信」に変えられる環境を、本校は全力で整えたいと考えています。そのひとつが、ピアノ指導に関する環境です。保育士になりたいけれど、ピアノを弾いたことがない。そうした悩みは、保育士志望者の中に少なくないからです。

ピアノ・歌を担当する教員陣はすべて音楽（ピアノ、声楽など）の専門家で、授業は個人レッスンの形態を採っています。また、完全防音のピアノ練習室を7室備えており、学生たちは予約を取っていつでも練習することができます。このため、授業以外にも、平日の放課後に2名の教員が希望者のレッスンに対応しています。

本校には、ピアノ初心者から、幼少期に習っていた学生、さらに音楽大学卒業生まで、幅広い演奏レベルの学生が在籍します。そのなかで、初心者には手の構え方や音符の読み方から指導するなど、週に2度の個人レッスンを通じて、それぞれの段階に応じたきめ細やかな指導を展開しています。

さらに、「リトミック」や「保育演習」などの授業でもピアノに触れる機会があり、学生たちは、日々の保育のなかで子どもたちに向けて発揮できる演奏技術を、数多く、自然なかたちで身につけることができます。

「子どもたちのお手本」になる

保育園は、主に0歳から5歳までの子どもたちを預かる場所です。小学校入学までのその日々は、生まれてから、子どもたちが自分なりの行動習慣を身につけていく期間に該当し、この時期に見聞きするすべてのものから子どもたちは多くのことを学びます。

いつか社会人として仕事に就き、家庭を持って生活していく未来を見据えた時に、他者と共存するために必要なマナー・社会ルールの習得は、生きる力として不可欠です。これらは、ある程度の年齢に達してから理論のもとで学ぶことも可能ですが、本校では、小さいうちに感覚で身につけることで、自然な振る舞いとして定着するものと考えています。

そのため、学生たちには、自分たちが「子どもたちのお手本」となる存在であることを、折に触れて意識させるように心がけています。本校が、言葉遣いや立ち居振る舞いなどの礼儀作法を徹底して指導しているのは、そのためです。

背筋の伸びた姿勢で人と接する姿は格好いい、きちんとした装いは美しい、相手を思うゆえの丁寧な言葉遣いは温かい。身近な人間を見て「素敵だな」と感じることが、子どもたちの振る舞いに大きな影響を与えると思うからこそ、真似されて恥ずかしくない振る舞いを身につけるように指導しています。

今日、子どもを育てる多くの家庭が、たくさんの悩みや不安と向き合い、時に孤立感を覚えているといわれています。その感覚は、少なからず子育てと子どもたち自身の生育に影響するでしょう。

子育ては、どれほどの苦労を伴うものであっても、本質的に楽しくわくわくするものでなければいけない。本校は強くそう思っています。だからこそ、多くの家庭の子育てが、今よりもっと楽しいものになるように、そのことが、子どもたちの明るい未来につながるようにと願い、心を注ぐことのできる保育士たちを育てたいと考えているのです。

育てたい登録販売者

健康をサポートする存在になる、という大きな目標のもとで、一般医薬品に関する知識を学びます。化粧水や乳液などの化粧品を作る授業も。

優れたアドバイザーとして、魅力ある販売者として

ハーベスト医療福祉専門学校の医薬健康学科は、登録販売者資格（2009〈平成21〉年6月施行）という新しい資格に、ふたつの理想像を描いています。それは、優れたアドバイザーであると同時に、魅力的な販売者である、ということです。このふたつを兼ね備えた人材を、今日の医薬品販売の現場に送り出すために、本校は2011（平成23）年度から医薬学科を設け、本年度から医薬健康学科と名称を変更しました。

登録販売者の有資格者は、ドラッグストア（薬局・薬店）をはじめ、スーパーマーケットやコンビニエンスストアといった商業施設内の薬品販売エリアなどにおいて、一般医薬品（第二類医薬品および第三類医薬品）の販売に携わることができます。健康増進・体調不良の回復・軽傷の治癒などのために店舗を訪れる人々に対して、カウンセリングの視点をもって相談にのるアドバイザーとしての役割が、求められるもののひとつです。

もうひとつは、販売者としての役割です。今日の多くのドラッグストアは、トイレタリー関連商品・化粧品などに加えて、食品ほか多くの日用品を扱っています。そして、置いてある商品が、店舗によって大きく異なることはあまりないため、店舗の売上げは販売者の技量によるところが少なくありません。そこで、「この人からものを買いたい」と思わせることのできる魅力が大切になるのです。

売ることがすべてではない

優れたアドバイザーとは、健康を望む人々に対して、大局的な視点でアドバイスができること、と本校は捉えています。正しい知識をもって的確なアドバイスを行うためには、相手の状況を一面的ではなく多面的に捉える力と、学んだ知識を相手の状況によって体系づける力とが大切になります。

例えば、腰痛を訴える方に対して、まずは痛みが凝りによるものか運動によるものかを判断するために、ふだんの生活形態を尋ねる。いずれかであれば「温める」「冷やす」のどちらがベターかを判断する。貼用（ちょうよう）のタイミングや方法とともに、生活のなかで軽減につながる工夫をアドバイスし、疾患によるものの可能性があれば一般医薬品で軽減できることでないことを伝え、医師の診察を受けることを勧める——といったように、その場で訴えた症状以外のところから判断できる力が必要なのです。

一般医薬品は、たくさん売ればいいというものではありません。本当に必要な時にのみ用いられることによって、健康をサポートするのが医薬品の役割で、時に「この商品はあなたには必要がありません」ということを伝えられる姿勢がとても大切になります。

登録販売者のこうした姿勢が、店舗を訪れる一人ひとりの健康を支え、自らの健康を維持しようとする気持ちを支えるのだと本校は考えています。そして、そのことの積み重ねが、店舗のある地域全体の健康をサポートす

ることにつながります。

超高齢社会の到来にあたって、本校がめざすのは、地域の人々の生活に寄り添いながら健康を支えることのできる人材を育てることです。

本校の医薬学科は、2014（平成26）年度から、「医薬健康学科」として名称と形を変えました。具体的には、登録販売者の資格取得をめざすカリキュラムを応用的に設定し、ヘルスケアアドバイザーおよびビューティーケアアドバイザー（日本チェーンドラッグストア協会認定）や販売士（商工会議所）の資格をめざすことが可能になります。

これに伴って、医薬健康学科全体として、健康に関する総合的なアドバイスを行うことをめざす「トータルヘルスケア」の考え方のもと、理学療法学科・介護福祉学科の実績・人材の力を借りて、カリキュラムの充実を図っていきます。

努力し続ける力を

薬を一般のお客様に向けて販売する仕事には、絶え間なく努力を重ねていく力と姿勢とが強く求められる、と本校は捉えています。

新薬の研究は日々進められており、今、症状と体質から導き出した〝ベスト〟の薬は、次に同じお客様が来店する時にはベストでなくなっているかもしれません。今日正解だったものが、明日は正解でないかもしれない。それほどに速いスピードで、医薬品業界は変化します。

そのなかで、お客様からの相談に応えたり、健康のための確かなアドバイスを行ったりしていくためには、常に最新の情報を受けとめようとする姿勢と、そこから多くを学びとって日々の実務に活かしていく力とが大切になるのです。

そして、そうした姿勢を教え、力をつけてくれるのは、店舗で実務を担う実習の日々です。

現場に教えられることは、その質も種類もきわめて豊かなものです。学生たちは卒業後も、登録販売者として働いていくなかで、たくさんの学びを身につけ、成長していくことになるでしょう。だからこそ、在学中の実習を通して、現場から多くのことを学ぶ素養を育んでほしいと考えています。

そのため本校は、1年間の実習中に、実習レポートのやり取りを「学生⇔教員間」で行っています。今日、お客様の反応から何を学んだか。明日、店舗の研修にどのような姿勢で臨むか。そうした課題提起によって、現場を知る・慣れることに加えて、与えられたチャンスから多くを学び取ろうとする姿勢を、学生たちが実習を通して身につけることを期しています。

登録販売者の資格取得には1年間の実務経験（80時間×12カ月）が必要です。そこで、1年生の7月～2年生の6月（予定）の間は、午前中は授業、午後は提携している薬局やドラッグストアでの実習を行います。

講義で得た知識を実際に実習の現場で活かし、定着させることができることに加え、実際に上司の指示に従って、商品の陳列、接客といった業務に携わることで、専門知識の理解を深め、現場で働く実践力を身につけることができます。また、この実習は時給という形で給与が支給され、2年間の学費のうち約40％を補うことができるデュアルシステムを採用しています。

両面を追求しながら

薬に関する優れたアドバイザーであると同時に、魅力的な販売者であってほしい。学生たちには、この両面を追い求める姿勢を、すべての学習のなかで持っていてほしいと思っています。そのための取り組みのひとつが、言葉遣いや立ち居振る舞いを含めた礼儀作法の学習です。

健康上の悩みを解決するために一般医薬品を選ぶ際、アドバイスを求める相手に対して、安心感・信頼感を持てることは、とても大切な要素になります。登録販売者には、相手の健康を気づかい、健康によって実現される幸せな毎日を思ってアドバイスを行おうとする誠実さが大切な資質になります。その誠実さを、目に見える形で表すものが、礼儀作法です。一方で、ドラッグストアで扱う日用品を販売する上でも、相手にとって心地良く感じられる身だしなみ・しぐさ・話し方が大切になります。

現場での実務において、学生たちは、アドバイザーと販売者というふたつの面を、日々求められることになるでしょう。その時に、一人ひとりのお客様に向き合うたびに、自らの持つ力を結集させて、最大限の対応を心がけてほしい。本校は、その願いを込めて、すべての学習のなかで、登録販売者の理想像を描き、それを念頭に学ぶことのできる環境づくりを意識しています。

大切にしていること
――心の教育

介護福祉学科で学ぶ「ブックトーク」の実習。聴きやすい声を、見やすい角度を、喜んでもらえるお話を。模索し続けるのは対象者の心に真心を届ける方法です。

伝統の「心の教育」

本校の母体である学校法人摺河学園は、兵庫県播磨高等学校の運営を通して、長い年月にわたって「心の教育」を実践してきました。他者を思いやる心を持ち、誰か・何かのために貢献することに大きな喜びと意義を感じる人間性を育てること。その新たな実践の場として選ばれ、開校されたのが本校です。

少子高齢化が加速している現代の社会において、厳しい国家財政を背景に予算の制約があるなか、医療福祉の現場はその「質」を、以前にくらべいっそう問われるようになりました。高齢者や障がいをもつ方々とそのご家族、小さな子どもを持つ家庭、健康に不安を抱く方々が安心して生活していくことのできる社会づくりには、数え切れない課題があります。

この分野を担う人材を育むために、伝統である「心の教育」を、もう一歩踏み込んで実践することを、本学園は使命と捉えました。

理学療法・介護福祉・保育・医薬品販売に関する仕事は、いずれも、人と向き合い、命と向き合う仕事です。だから、ありのままの相手と向き合い、相手を思って、生きることへの夢を一緒に描くことのできる人間を育てたい。それが、開校に当たって、本校がいちばんに願ったことでした。

「相手を思う心」を学ぶ科目

本校では、「心の教育」を実践するため、全学科共通のオリジナル必修基礎科目として、「ホスピタリティ・デザイン学」と「コミュニケーション学」を開設しています。

「ホスピタリティ・デザイン学」では、「形から入って心を育てる」という考え方に基づき、美しい立ち居振る舞い、挨拶、身だしなみ、言葉遣いなどを身につけ、医療福祉の現場で求められる人間性を養います。「相手の立場に立って考えること」を軸に、自らの立ち居振る舞いを常に見直しながら、美しい所作やマナーを通じて、「信頼される社会人」としての基本を学んでいきます。

もうひとつの「コミュニケーション学」では、ホスピタリティ・デザイン学で学んだことを基礎として、実際にさまざまな立場の人々と関わるなかで、コミュニケーションをより円滑にできる能力を培います。そのうえで、医療福祉の現場で不可欠となる「心の通い合う人間関係」を構築するために、ノウハウとスキルを身につけることを目的としています。

「ホスピタリティ」という考え方

ホスピタリティとは、他者を思いやる気持ちから生まれるものであり、相手の気持ちを察して行動すること。それが本校の考えるホスピタリティの基本です。この〝行動〟のために、礼儀作法やマナーが大切になります。

とりわけ、理学療法・介護福祉・保育・医薬販売の現場では、本当の意味でホスピタリティの姿勢が求められます。それは、これらのどの仕事においても、サービスの受け手と送り手のあいだに、心の通い合ったしっかりとした信頼関係が不可欠だからです。

仮に自分の家族が病気や事故によって身体に障がいを抱え、日常生活が不自由になったとすれば、病院や施設、自宅などでリハビリテーションや介護を受けることになります。そうした際、担当する理学療法士や介護福祉士を、自分が「信頼できる」と思えるかどうかは、とても大切なことです。保護者から大切な子どもを預かる保育士や、医薬品を扱うプロとして接客する登録販売者も同じように、サービスの提供側と受け手とのあいだに、信頼関係があって初めて成り立つ職業といえます。

その理由は、これらの職場においては常に、「命」にかかわる責任が問われるからです。だからこそ、「相手の立場に立って考えること」が大切になってきます。リハビリに励む人、介護が必要な人、幼い子どもたち、健康のことで悩む人。これらの方々に対して、いつも相手の立場に立ってものごとを考える。そうすることで、自分の考えを押し付けるのではなく、相手が本当に求めることを実行できるのです。

一人ひとりの人生を見据えて

人間としての魅力は、日々の生活に根づいた形で身につけたものでなければ、本物とはいえません。付け焼刃で身につけたものは、すぐに相手から見透かされてしまうでしょう。普段から自分を磨き、心の成長を促す姿勢がきわめて大切になります。

だからこそ本校は、ホスピタリティ・デザイン学やコミュニケーション学といった授業の場だけでなく、学校生活そのものを、心の成長を促す場、自分を磨くことのできる場である、と捉えています。

「ホスピタリティ・マインドカード」と呼ばれる制度は、その象徴ともいえる取り組みです。これは、学校生活や現場実習において、「感動を与える」行いがあった学生に対して、教職員がホスピタリティ・マインドカードにその旨を記入します。一定以上のカードを獲得した学生は、顕彰の審査対象となるなど、大きな励みとなっているようです。

このように、学校生活全般のなかできめ細かく展開される本校の「心の教育」は、学生一人ひとりの人生を見据えた取り組みともいえます。「ホスピタリティを身につける」ということは、学生が社会に出た後も、飽くなき向上心のもと、継続して追求していくべきものであり、そこに明確な答えがあるわけではありません。相手によって、またその場の状況によって、ホスピタリティの形は千差万別だからです。そのすべての土台となる考え方が、「相手の立場に立って考えること」なのです。

学生たちには卒業後も、それぞれの現場で働きながら、それぞれのホスピタリティを追求し続けてほしい。あらゆる場面で、「相手が本当に求めていることは何なのか」「それをかなえるためにはどうすべきなのか」を考え、しっかりと行動に移し、一人でも多くの人を幸せにできる人間として成長し続けてほしい、本校はそう考えています。

「守」から「破」への進化を

本校では、学生たちが将来、社会に出た時、社会人としてのルールに対応できるように、学生生活における基本的なルールを決め、遵守するように指導しています。そして現在、学生が自ら考え判断できる自立性を養うことを目的として、このルールの一部変更を検討しています。

その理由は、本校の「心の教育」の原点である「形から入って心を育てる」を、さらに一歩前進させたいからです。まず、しっかりと形を理解し、自然にそれができるようになる。すなわち「形から入る」ということは、すべての原点となる基礎基本です。そして、この原点をしっかりと自分のものにすることによって、応用が生まれます。

茶道や武道に用いられる言葉「守・破・離」は、それぞれの「道」の上達に至る経緯を示しています。「守」とは、師の教えを正しく守り、それをしっかりと身につけること。「破」とは、師に教えられしっかりと身につけたことを、自らの特性に合うように心がけ高めること。そして「離」とは、「守・破」の段階を経て到達する、何物にもとらわれない心のあり方を指します。

例えば、お辞儀であれば、正しい方法・型を学び、それを相手への尊敬・親愛の気持ちとして表現できるまでに上達させる。そしてその先に、相手を思う心ゆえに、場面によって〝型を破ること〟も含め、使いこなす段階があることを示しています。

「守」は、「守」そのものに到達することが目的ではなく、必要な通過点に過ぎないものです。「守」から「破」へと進化していくなかでこそ、心が伴う美しさへとつながっていく、そう本校は考えています。

すべての学生が「破」の段階に届き、知識・所作の集合体としての〝教養〟を身につけ、自分なりの心・気持ちを込めた振る舞いを通じて、相手と豊かなコミュニケーションを築けるようになること。それは、本校が掲げる「建学の精神」の確かな実践といえるでしょう。

大切にしていること
――現場主義・実践主義

理学療法学科の授業。入学後、学生たちはまず、人の身体の仕組みを徹底的に学びます。この段階から、現場を見据え、現場を意識しながら学習しています。

命と向き合う仕事だからこそ

理学療法、介護福祉、保育、医薬品販売のそれぞれの現場で働いていくための、専門的な知識と技術を身につけさせることが、専門学校である本校の基本的な役割です。いずれの現場でも、向き合うのは人の命です。知識や経験の不足による判断ミス、技術が未熟であることによる失敗が、基本的にあってはならない仕事。それが、学生たちがこれから就こうとしている職業です。

そのため本校は、専門科目の学習において、「知識の取得（講義）→実践（演習・実習）→振り返り（演習）」のサイクルを繰り返すことを意識しています。知識が、現場で実際に活用できるものとして定着しているかどうかを、このサイクルによって確認していくことができるからです。また、「振り返り」のプロセスには、就職したあとに、経験を次に活かすことで常により良い対応を追求し続ける、という習慣を身につけてほしい、という意図も込められています。

「知識」と「技術」を組み合わせる力

さらに本校は、学んだりおぼえたりした「知識と知識」「知識と技術」を組み合わせ、体系化させることで、状況に合わせて最もふさわしい対応を選び取って実施する力を、とても重視しています。健康をさまたげる症状や、生活していく上での問題など、学生たちが現場で向き合う課題の多くは、単一的な要因から生まれている問題ではありません。また、課題を解消するための方法も、ひとつではありません。向き合う相手の数だけ、提示するケアの種類があり、導くべき方向があります。そのために、持っている知識と技術とを使う力が必要なのです。

現場を意識させる工夫

本校では、各学科の教員の多くが、プロとして現場で働いた豊富な経験を持っています。このうち理学療法学科では、教員の大部分が、学生たちの指導のかたわらで、現役の理学療法士として仕事をしています。そうした教員の指導を受けることで、学生たちは、教員を通して現場のいまを見つめることができます。授業のなかで教員たちは、意図的に現場の話題を持ち出し、現場の様子をリアルに描くことができるように配慮します。

また、演習では対象者の置かれた状況を最大限詳細に設定し、対象者の背景・心の中・周囲の人々の存在を意識できるよう工夫しています。そうした指導を通して、学生たちは、蓄積させるための知識ではなく、役立てるための知識をつけなければいけないと強く意識するようになっています。

さらに、校内で演習を行う際に、挨拶や言葉遣いを徹底させることにも、現場だったらどう振る舞うべきか、を考えさせる意図があります。このことは同時に、礼儀作法が礼儀のためではなく、思いを相手に伝えるための形であることを、学生たちに伝えています。

実習に多くの時間を割いているのが、本校カリキュラムの特色のひとつです。理学療法学科は、資格取得のための規定である810時間よりも2割以上多い「990時間」を確保しています。また、介護福祉学科は、2年間で450時間の実習以外に、見学やボランティアなどで現場に足を運ぶ機会を多く持ちます。リトミック保育学科は、8週間の実習以外に、リトミックや絵本の読み聞かせを行うため、地域の公立保育所をたびたび訪れています。さらに、「大きな器づくり」をコンセプトに保育を行う姉妹施設「岡本ハーベスト保育園」の存在があることで、季節の行事のたびに同園の子どもたちと交流したり、同園園長の講話を聴いたりする経験を、数多く持つことができています。また医薬健康学科では、薬局やドラッグストアでのアルバイトを通した実習を行うため、1年生の後期から、きわめて長い時間を現場で過ごすことになります。

進化を続ける業界で

専門知識と技術を身につけさせるという基本的な役割と、就職後に「成長し続けること」「現場のあるべき姿を問い続けること」への意志を持った人間を育てることを軸に、本校は「現場主義・実践主義」の徹底を図っています。

4学科の先にあるそれぞれの現場は、常に、時代のニーズに合わせて変化し、進化することを求められています。医療福祉のサービスを必要とする人々の置かれている状況は、めまぐるしく動く社会情勢と密接に関わり合っています。また、〝最新の技術〟が最新である時間は短く、新しい発想や考え方も日々生まれてきます。であれば、そこで働く人間が、活躍し続けていくためには、自身が成長を続けていくことが欠かせません。

将来像を描く機会

本校には、プロとして働いた経験を持つ教員が多いことで、学生たちは、身近に「あんなふうになりたい」という目標・憧れる像を見つけ、自分の将来像を明確に描くこともできているようです。共に学ぶ同級生としての夜間学生や職業訓練生の存在も、少なくない影響を与えています。

さらに、卒業生や上級生が参加して行う演習・OSCE（客観的臨床試験）・国家試験対策授業・施設見学などの体験も、「前を行く誰か」に自らの将来像を重ねる経験を、学生たちに数多く届けることができているようです。

あるべき姿を模索する姿勢

本校は、4学科すべての学生たちに、卒業後、ただ現場の一員としての働きを提供するだけでなく、現在の医療福祉が抱える問題は何か、未来の医療福祉はどうあるべきか、ということを模索する姿勢を持ってほしいと思っています。また、就職したそれぞれの環境のなかで、周囲と協力しながら、「今日よりもっと良い対応を実践できる明日」を探すことのできる人間であってほしいとも願っています。

本校や姉妹校の教員、姉妹施設の保育士のほか、外部講師を招いて話を聞く機会を数多く経験することで、学生たちは、医療福祉の視点から、社会を見渡すことができます。そして、その社会の一端を担う存在としての理学療法・介護福祉・保育・医薬品販売の仕事と、そこで働く将来の自分とを意識します。

一方で、講義、演習、学校行事を含めたレクリエーションの機会に、チームやグループで行動する機会を多く設けています。人は人と行動を共にし、共に課題に向き合う際に、自分自身に与えられた役割を意識します。また、自分にこそ担うことのできる役割を探そうとします。そのことが、現場で周囲と協調しながら最大限の成果を生み出していこうとする姿勢を育むと考えています。

学生たちは、それぞれの現場で働き始めてから、時につまずいたり悩んだりしながら、試行錯誤を重ね成長を続けていくことになるでしょう。時に、失敗することもあるかもしれません。それでも医療福祉の領域の仕事において、「最初は失敗してもいい」「二度繰り返さなければいい」という考え方は、基本的にはあってはならないと思っています。

だから本校は、学校生活のすべてにおいて、常に現場を念頭に置き、実践を意識しながら知識と技術とを学ぶ環境づくりに、力を注ぎたいと考えているのです。

大切にしていること
――師弟同行

理学療法学科における指導。「自分が努力を続け、もっと成長しようとしていなければ、学生たちを導くことはできない」（理学療法学科・教員）

いちばんの味方になるために

本校の学生たちがめざしている職業は、いずれも、人の人生を左右することにつながるという意味で、きわめて責任の重い仕事であると考えています。人と向き合う仕事として、日々のなかでたくさんの気配り・気遣いが不可欠であり、命と向き合う仕事として、気を抜くことのできない緊張感が求められます。そのなかで、常に相手の立場に立とうと努め、相手のためを思って働き続けることには、強い気持ち・心が必要です。

本校は、学生・卒業生たちにとって、心を支える存在でありたいと考えています。その思いのもとに、教員たちが実践しているのが、一人ひとりを見つめる教育です。

ひとりの学生に対して、学生生活を楽しめているか、授業についていけているか、目標を見失ってはいないか、ということを、日々の表情や言動から読み取り、ふさわしいやり方で対応することを、本校教員の全員が、すべての学生に対して行います。本気で取り組んでいれば、誰かが必ず支えとなること。真剣でいれば、誰かが味方になること。その事実を知ることが、人生のさまざまな壁を前にした時に、心を強く支えると思っています。

クラス担任制の導入

本校が、専門学校でありながらクラス担任制を導入しているのは、一人ひとりを見つめる体制を充実させるためです。クラスがあり、クラス担任がいることで、出欠確認、連絡事項の通知、授業態度や成績の把握などが徹底されます。科目担任が、専門科目の習熟度を把握・管理する役割を担うことに対し、クラス担任は、生活も含めた「学生ひとりのすべて」の把握・管理を担います。

このクラス担当の教員が中心となって、科目・実習担当の教員たちと協力しながら、ひとりの学生をサポートする。そのことによって、学習に対する迷いやつまずきの兆しがあれば早めに対処し、生活面での悩みがあるようであれば手を差し出すといったように、学生が抱える問題に、しっかりと向き合った導き方が実現しています。

「生活面でトラブルを抱えていれば、態度が荒れることもあります。〝誰も気持ちを分かってくれない〟と言われることもあります。そういう時こそ、私は分かりたいと思っている、あなたを理解したいと思っている、と、こちらの思いをきちんと伝えます」（リトミック保育学科・教員）

「この学校を出て良かった」と思える学校に

こうして、複数の目で学生たちを見守ることによって、突き放すことも含めた厳しさが必要なケースではこの教員、寄り添って共に歩く指導がふさわしいケースではあの教員、というように、それぞれの学生の気質と状況によって、より良い指導方法で当たることも可能になっています。

「就職や資格取得を実現させるだけではなくて、自分

の教室があって、自分のクラスがあって、自分の先生がいて、いつか〝この学校を出て良かった〟と学生が振り返ることのできる学校でありたい、そういう指導を心がけてほしいと、着任した時から言われていた」（医薬健康学科・教員）

社会における道しるべ

「社会に正義なければ正義の先達となり、礼なしとなれば礼の実践場となるべき使命がある」

学校法人摺河学園　第二代理事長・摺河昭彦

本校では、「心の教育」を追求するなかで、立ち居振る舞いや言葉遣いを含めた礼儀作法を学ぶと同時に、各科目の専門的な授業においては、相手を思う気持ちを大切に育む指導を意識しています。それは、現場で働く未来において、相手に対して心で接することのできる人間になってほしいという思いによるものです。

さらに、学生たちを社会で通用する人間に育てていく役割の一方で、社会の本来あるべき姿を学生たちに示していくこともまた、学校の役割であると本校は考えています。

学生たちの就職先となる病院・施設・園・店舗のすべてが、必ずしも医療福祉の進むべき道を歩んでいるとは限りません。就職後に出会う対象者を取り巻く環境が、対象者の心に向き合い寄り添ったものであるとも限りません。理想的な状況ばかりではない社会において、何が正しく、何が間違っているのかを判断し、自らの判断を信じて行動していくためには、道しるべが必要であると考えています。

本校教員のすべてが、各学科の現場か、教育の現場における豊富な経験を持っています。それぞれの経験を通して学んだことを、経験談として話したり、考えさせるかたちを採ったりすることで、学生たちに伝えるよう努めています。

率先垂範の姿勢で

一方で、礼儀作法についても、まず教員たちに徹底させることから指導をスタートしています。服装を含めた身だしなみ、挨拶・礼の仕方などを、校内で教員たちが実践することで、学生たちには緊張感が生まれます。同時に、礼儀を携えて教員から接してもらうことによって、自分が相手から大事にされているのだという感覚が、学生たちのなかに重ねられていきます。そのことによって、礼を尽くすことの意味を、学生たちは自然なかたちで学んでいきます。

また、医療福祉の現場では、時として相手に対して指導的な立場に立つことがあります。例えば保育士は、子どもたちに対していけないことは「いけない」と伝えられるようでなくてはならないし、理学療法士には、患者さんが挫けそうな時に、時に厳しい言葉で導く場面があり得ます。そこで不可欠になるのが、率先垂範の姿勢です。誰かのことを本気で思い、導くためには、自分の振る舞いを見つめることから始める。そのことを、学生たちは教員の姿から学んでいきます。

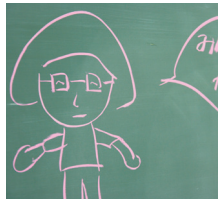
いつの日か、仲間として

本校の教員と学生とは、何年か先に、同じ仕事に携わったことのある先輩・後輩の関係になります。その意識のもとで、教員たちは、それぞれの現場をより良い方向へ導いていくことのできる未来の仲間として、学生に接し、指導に当たっています。教えた学生とともに再び現場に立つことを、夢と捉えている教員もいます。もっと先の未来のことを話すこともあります。

「いつか身体が思うように動かなくなった時に、私だったらこんな介護をしてほしい、こんな介護はいやだ、なんていうことをよく伝えています。私がおばあちゃんになった頃、きっとみんなは介護現場にいるんだから、誰かに当たるかもしれないんだから、これちゃんと覚えておいてねって」（介護福祉学科・教員）

志望する職業に就いた先輩から、一人の人間として対峙され、将来に期待してもらえること。いつか仲間として活躍する日のことを、楽しみに待っていてもらえること。その実感は、勇気やモチベーションにつながると同時に、自分を信じてくれる人の存在を学生たちに知らせます。また、卒業生たちは、本校に立ち寄って教員と会話する際に、教員たちが最新の現場を卒業生から学ぼうという姿勢で接することに、誇らしさを感じ、そのことが日々の仕事への取り組み方にもつながっているようです。

自分が頑張ることが、誰かを喜ばせ、誰かの夢をかなえることにつながる。医療福祉の現場で働く上で最も大切なこうした心のあり方を、教員たちとの関係を通じ、確かな実感を通して、身につけてほしいと本校は考えています。



大切にしていること――「希望の職場」実現

理学療法学科夜間部の授業が終わった時間。年齢も、これまでの経歴も大きく異なる学生たちが、共に学んでいます。

求人数が増えていく理由

本校には毎年、学科を問わず、就職希望者に対して十数倍以上の数の求人（有効求人倍率14～30倍）をいただきます。また、病院・施設・園・店舗から、「卒業生がほしい」という要望を聞くことも、年を重ねるごとに増えています。

本校の教育理念、理想とする人間像、各学科が描く職業像は、いずれも、「現場に必要とされる存在」を見据えています。求人の数は、本校の教育と、本校で学ぶなかでの学生たちの努力の、ひとつの成果であると捉えています。

加えて、就職に向けた準備に対して教員たちがさまざまなかたちでサポートを行っていることと、本校が地域とのあいだに信頼関係を築こうとし、結果として優良な病院・施設・園・店舗とのつながりが確立されていることの2点が、今日の求人数に結びついていると考えています。

本人が望む場所で、できるだけ長く

本校教員は、学生たちの就職に際し、共通した考え方を持って指導に当たっています。それは、すべての学生が、本人が「ここで働きたい」と主体的に思える場所で、長く活躍し続けることを見据えた就職をサポートする、ということです。

その上で、個々の学生に向けて、就職に当たって課題となる点・本人が助けを必要としている点を中心に、それぞれに合わせたサポートを行っています。そこに、教員たちが、労力や時間を惜しむことはありません。

学生に対する基本姿勢として、どうような理由であれ「ここに行かされた」という感覚を持たせないようにすることを重視しています。そのため、最終的な判断は必ず学生自身に決めさせます。その判断に客観性を持たせ、できるだけ本人にとって正しいものになるように、学校は、可能な限り多くの情報・判断材料を提供することに力を注ぎます。

「求人票の出ていない小規模な園を希望した学生がいました。見学に訪れた際に、本人なりに魅力を見つけたようでした。そこで、直接電話をかけさせて、〝勤めたいです〟という希望を申し出てみたらどうか、と提案しました。電話のかけ方から希望を伝える方法まですべて指導し、臨んだ結果、求人をいただくことができました。自分の働く場所を自分で開拓したケースでした」（リトミック保育学科・教員）

「考える→アドバイス」の順序

就職サポートに際しては、学生たちにまず自分で考えさせ、考えた結果をもとに、適切なアドバイスを行う、という順序を必ず守るように意識しています。

アドバイスでは、学生一人ひとりの適性や希望を多面的に把握し、それらを十分に踏まえ、本人が考えた就職

先以外の選択肢を示します。興味・関心を持った就職先については、見学やボランティアに出向いて必ず自分の目で確かめるよう指導します。その上で、学生が考え、教員がアドバイスを行うという基本の順序を繰り返していきます。

例えば理学療法学科の学生たちは、就職担当を兼ねる北浜伸介学科長を通じて、求人応募を提出します。その提出前に、すべての学生を対象に、約30分程度の学科長面談が行われます。本人の希望や興味・関心を聞いた上で、「こういう病院から求人がきているがどうかな?」「この病院の特色は○○なところ」「ここはこれから△△の展望が開かれる可能性が高い」など、学生一人ひとりに対して有益な情報を探り、それを伝えるように努めています。

一方で、就職を具体的に意識するようになる2年生(理学療法学科は3年生)の夏以降、〝いまの自分〟と〝職場でのあるべき姿〟のギャップをあぶり出し、本人の自覚のもとに改善を図る努力を促します。そのギャップが、知識・技術によるものか、働くことへの心構えによるものか、などによって、それぞれの導き方を模索します。

「優良就職先」を見定める目

医療福祉に携わる仕事は、基本的に、すべてが高い志のもとで行われていると考えています。しかし現場における現実として、さまざまな事情や環境によって、「対象者のため」が優先されていないケースも、少なくはありません。高齢者施設や保育園などに関する日々の報道によって伝えられる事故や事件のニュースは、本校にとって、身近な問題でないとは言えません。

だからこそ、本校の学生たちには、現実が100%ではないとしても、医療福祉のあるべき姿を追求する姿勢を保ち続ける就職先を見つけてほしいと思っています。そうした就職先で、現場を担うことのできるひとりになってほしいと願っています。

そのためには、何をもって「優良就職先」であるか否かを判断するのか、という目を養うことが必要です。ここでも、教員たちが判断基準を直接的に教える方法は採りません。ただ、日常の授業や、実習もしくは見学時に、そうした視点で病院・施設・園・店舗を見るという発想を持たせる工夫を行います。

例えば介護福祉の現場では、施設入居者が廊下で待たされていたり、ケアが途中で中断されていたり、という様子が見えたら、施設運営と心のあり方になんらかの問題を抱えていると考えられます。

また、保育の現場で、職員がいつも走り回っていたり、泣いている子どもたちが特別な意図なく放置されていたりする場合も同じです。実習や見学の経験を、就職先を決める時のために最大限に活かすためにも、「何を見るべきか」を指導することを、とても大切に考えています。

「マッチング」のための工夫

長く活躍し続けることのできる就職先を見つけるために、対象となる病院・施設・園・店舗が、学生自身の性質とマッチしていることも大切です。

理学療法の現場では、病院と高齢者施設で、仕事の内容・力点が異なります。また、急性期・回復期・維持期のどの患者さんに対応するのかということも、就職先によって確率は異なります。

介護福祉の現場では、高齢者施設と障がい者施設とでは、介護福祉士に求められる技術、とくにコミュニケーション能力が大きく異なります。保育や医薬品販売の現場にも、同じことが言えます。

ひとくくりの職業でも、それぞれに専門性があり、求められる力が違う。であれば、現場を細かく分けて考えた時に、自身の心がどこへ向いているのかを、学生たちが自分で認識することが大切になります。

子どもたちの幸せな未来を願って保育士を志す学生の夢を、さらに紐解いた時に、一般の園で共働き家庭の子育てを支えたいのか、障がい児保育に携わって障がい児たちの未来を広げる手助けをしたいのか、が見えてきます。

心の向く先が分かれば、必要な知識・技術と心構えが、自ずと見えてきます。そうした考え方によって導き出された「必要なもの」「足りないもの」に備えることが、ひとりの学生にとって本当に必要な就職準備だと考えているのです。

理学療法学科・医薬健康学科における国家試験対策にも、教員たちによる徹底したサポート体制を整えています。ひとことで言えば「最後まで面倒を見る」ということで、授業を中心とした反復学習を基本とし、試験前に補講を実施します。

さらに、国家試験担当教員を設け、ここに国家試験の状況と、全学生の情報を集約させる仕組みをつくり、集めた情報をもとに、一人ひとりにとってベストの指導をめざしています。

一方で、国家試験で不合格だった学生に対するフォロー体制も構築しています。「最後まで面倒をみる」は卒業後も続き、希望者は「リトライ組」として、卒業後も校内で学習を続ける環境を整え、夜間に特別授業を数コマ組み入れるなど、無償によるバックアップを行っています。

大切にしていること――地域との信頼構築

地域の子どもたちを招いたクリスマス会（上）と、高齢者の方々や子どもたちとともに行った七夕の短冊つるし（下）。日々の学びが、地域への貢献にいつかつながることを学生たちは再認識します。

医療福祉に関する情報の「発信地」に

2008（平成20）年の開校時、本校は、医療福祉関連の情報を地域社会へと発信していく場所、すなわち「情報の発信基地」になりたいと考えました。

そのため本校は、今日の社会において医療福祉のあるべき姿とは何か、どのような未来を見据え、そこへどう向かえばいいのかという問いを、自らに投げかけると同時に、地域とともにその答えを探す姿勢を保ち続けたいと思っています。

学校もひとつの現場として

社会に開かれた場所であろうとすることは、学生たちのためでもあります。本校は、教育の場であるとともに、ひとつの現場でありたいと考えています。そのことで、社会における医療福祉のあり方を学生たちが在学中から意識し、その変化をもリアルタイムで捉えることができると考えているからです。

地域の健康を支える

学園祭では、演習授業のなかで使用している測定機器を用いて、地域の皆様の健康診断を行っています。血圧、部位別筋肉量、骨格筋量などを学生たちが測定し、本校が発行している「マイカルテ」に数値を書き込みます。

血圧が少し高いようですね。運動不足ですか？　短い距離でいいので歩いてみるといいかもしれません。医療に踏み込んだ言及はできないものの、こうしたやり取りを通して、学生たちは、地域の方々の健康をわずかながら支えていることへの責任感を育んでいます。

実践の場を多く持つこと

学科ごとに、地域の方々とのつながりを作る取り組みも展開されています。例えば介護福祉学科では、地域の高齢者を招待するかたちでお花見会やクリスマス会を実施しています。また、介護入浴の実演・実践や、車椅子体験の機会を提供し、学生たちがサポートを行います。介護福祉の専門的な知識・技術を持たないまま、家族で認知症を含む高齢者介護を行っている家庭が増えている今日、この取り組みは、実践的に役立つものとして喜ばれているようです。

一方、リトミック保育学科では、地域に住む子どもたちとその保護者を招いて、集団保育を体験する「子どもハーベストルーム」を実施しています。学生たちに、日常的に子どもたちと接する機会を提供するとともに、保護者の方々に対して本校発の安心を届けることができればと考えて行っているものです。

医療福祉はどうあるべきか。どう変わっていくべきかを、学内だけでなく、地域・社会を見つめながら考えていくことが、いつか、地域にとって「ハーベストがあって良かった」と思っていただくことのできる学校になる道程なのだと考えています。

大切にしていること
――仲間と共に

合同オリエンテーション時の理学療法学科の学生と教員たち。（上）喜び合い、肩をたたき合い、悔しさやつらさを共有し合う仲間の存在は、いつかそれぞれの現場で、頑張っていくための力になります。

チームで携わる仕事に就くために

本校4学科の学生たちが、卒業後に出ていく現場では、ほぼすべての場面においてチームによって仕事が進められます。ひとりの対象者の周りには、さまざまな仕事があります。たくさんの仕事の集合体によって、対象者の人生は支えられています。

そうした現場で活躍していくためには、チーム内における自らの仕事を確実に全うする力、チーム全体が進むべき方向を見定める力、チーム内の環境をより良い方へと導く力が求められると考えています。

そのため本校では、学生たちが、チーム・グループ内で行動する機会を、数多く設けています。新入生が入学して間もない時期に行う宿泊オリエンテーション、演習におけるグループワーク、各学科が科目によって取り入れているグループ学習などが、その一例です。

「チームとしての責任」を意識する

宿泊オリエンテーションは、全学科（1・2年生）合同で行われます。兵庫県三木市にある研修・宿泊施設において、「学習の方法」「実習における目標設定」などのテーマを設定し、学科別研修会を行います。学科・学年の異なる学生たちと教員が寝食を共にする環境のもとで、それぞれの職業像を具体的に描き、校風の理解、意欲の醸成などを図ります。日中に仕事をもつ夜間学生（理学療法学科）や、職業訓練生なども含めた全員が参加することを徹底しています。

また、主に実技の授業時に取り入れられるグループ学習では、チームで協力して課題に向き合い、解決方法を探していく学習に加えて、「チームとしての責任」を学生たちに意識させる機会を設ける工夫を行っています。

課題に対してふさわしいプランを導き出すことができなかった、施すべきケアに対して技術が足りていなかった。こうした問題は、時に個人の資質によることが少なくはありません。しかし、医療福祉の現場において、同じことが起きた場合には、当然ながらチームで対応していくことになります。責任をチームで引き受け、チームで対応するという習慣を、学生のうちから身につけてほしいと考えています。

そして、チームで行動するからこそ、自分自身の努力が大切であるという発想を、こうした学習のなかから導き出してほしいと思っています。

ひとりではないという意識

4学科の先にある職業は、いずれも、たくさんの人々の人生を支える仕事です。言い換えればそれは、相手に対して「あなたはひとりではない」というメッセージを、仕事を通じて伝え続ける仕事なのだと考えています。そのために、学生たち自身も、何かがあった時に助けてくれると信じられる仲間、もしくは進んで助けたいと思える仲間を、本校内で見つけてほしいと考えています。

大切にしていること――帰れる場所

保育士として働く卒業生たちが本校を訪れて懇談会を行います。（上）本校３階にある図書室。（下）各学科の専門書籍に加えて、「心の教育」に関する書籍も充実させています。2012（平成24）年からはふたりの司書が常駐。卒業生が訪れて文献にあたる姿もしばしば見られます。

母船のような存在に

理学療法学科のアドバイザーであった嶋田智明教授が、開校時、本校の未来像を「母船」と例えたことがあります。

「学生と学校との関係は、卒業で終わりではない。学校は、海原へ漕ぎ出た卒業生たちが、いつでも戻って来ることのできる船のような場所であってほしいと思っています。同時に、卒業生たちには、教員・講師とともに在校生を支える力になってほしい」。

今日、本校は、少しずつですがそうした存在になることができつつあるようです。仕事の後や休日に本校を訪れる卒業生も少なくありません。

共感・共鳴する姿勢が支える

例えば、理学療法士として仕事をしていると、臨床疑問、学会発表、学術大会の研究報告などに取り組む機会があり、卒業生たちは質問や相談をもって教員を訪ねたり、図書室を利用したりすることがあります。

また、就職したての時期に、介護福祉・保育の現場で時間に追われる日々を送る卒業生たちは、それぞれが悩みを抱えたまま走っています。その悩みを、在学時に2～3年間という時期を共に過ごし、自分の多くを理解してくれている教員に話すことで、気持ちが整理される部分は多々あるでしょう。別の卒業生のことを「あの子もこうして頑張っているよ」「あなたが活躍していることを話しておくね」と伝え、同期の仲間を意識させることで、勇気が出ることも少なくないようです。

4学科の先にあるのは、いずれも答えの出ない仕事です。こうであれば正解、こうであれば不正解、という明確な着地点のない世界で、対象とする一人ひとりにとっての〝正解〟を共に見つけることをめざしていく仕事には、共感・共鳴する存在がとても大切だと考えています。

助け合う関係で

一方で、本校には、卒業生たちに助けられている部分が多くあります。本校では、研修会、勉強会、講習会といった催しがたびたび実施されます。この際に、卒業生たちに声をかけ、運営のサポートを頼むことがしばしばあるのです。

また、理学療法学科の卒業生によるチューター制度に加え、他学科でも、「ハーベストタイム」という時間を設け、卒業生と在校生の交流授業を行っています。

2013（平成25）年には、念願だった同窓会が設立されました。卒業生たちとの交流を通して、本校も社会や現場のニーズに敏感な姿勢を保ちたいと考えています。

本校は、他者のために行動し、他者を喜ばせることを自分の喜びと捉えることのできる心を大切に育みたいと考えています。だからこそ、誰かの役に立ちたいと学生たちが考える「誰か」に該当する存在に、本校自身がなりたいと思っているのです。

未来への決意
――日本一の専門学校をめざして

ハーベスト医療福祉専門学校は、「建学の精神」に則り、学校法人摺河学園が九十余年にわたって取り組んできた、人間の内面を磨く「心の教育」という特色を、さらに進化・発展させることを常に意識して力を尽くしています。人間としての成長に努めることで、社会に出た時に、誰からも信頼され愛される人間に育ってほしい。本校は、この基本方針のもと、あらゆる教育活動を展開しています。

その象徴ともいえる全学科共通のオリジナル必修科目「ホスピタリティ・デザイン学」は、「形から入って心を育てる」という考え方に基づき、挨拶や言葉遣い、立ち居振る舞い、身だしなみなどを身につけていくなかで、それらを品性や品格にまで高めてもらいたい、という思いが込められています。学生一人ひとりが、このことをしっかりと理解・認識しながら学校生活を送ることにより、人間としての基礎・基本が形成されるはずです。それを土台として、それぞれが専門分野においてさまざまな経験を重ねることで、真のプロフェッショナルへと羽ばたくことが可能になると思っています。

一方、本校では、教職員におけるチームワークを重視し、信頼・協力関係の構築に努めてきました。週1回行われる学科会議では、情報・方針の徹底共有を図り、学生一人ひとりを見つめる機会となっています。2014（平成26）年度には、教員同士が互いに学び合い、良い点を採り入れる「研究授業」もスタートしました。すべての教員がなにごとにも向上心をもって取り組む姿勢は、多くの学生にさまざまな好影響をもたらしています。

ふたつの大切なこと
――「卒業後」と「地域発信」

未来を見据えた時、本校はふたつのことを大切にしていきたいと考えています。ひとつは、卒業後にいつでも戻って来られる学校、という側面です。「卒業したら終わりではなく、卒業してから始まる」。学生が社会に出た後も、常に向上心をもってものごとに取り組めるための環境を、本校は全力で整えていかなければなりません。2013（平成25）年末に発足した同窓会は、これからリカレント教育を積極的に展開していく上でも、中心的な役割を担ってくれるものと期待しています。

学校にとっていちばんの財産、それは卒業生にほかなりません。この財産を常に磨き続ける環境を提供することで、一つひとつの輝きは一段と増していくでしょう。そのことが、本校自身の輝きにもつながるのです。

もうひとつの大切なことは、地域社会へ情報を発信していく役割の強化です。地域の方々に医療福祉の大切さを知ってもらったり、本校の教育資産としてのスキルやノウハウを提供したりすることを通じて、地域社会の充実・発展に少しでも貢献していきたいと考えています。

「日本一の専門学校」への挑戦

地域にとって有為な人材を育み続けること、地域の方々に開かれた学校づくり――このふたつを実現していくために、本校は「心の教育」という教育方針のもと、授業や実習指導、学生指導、さらに資格取得や就職のための支援など、あらゆることに関して一切妥協することなく、あるべき姿へ向けて誠実かつ真摯に一歩ずつ歩んでいきたいと考えています。

そして、その積み重ねの先に、「日本一の専門学校」としての評価がある、と確信しております。

学校法人摺河学園 理事長　摺河美代子

ハーベスト生はどう学んでいるのか

ハーベスト医療福祉専門学校では、真摯な学びを通じて高度な専門的知識や技術を習得するとともに、人間性の陶冶に力を注いでいます。学生たちにとって本校は、単に国家資格の取得や就職を目的とする場ではなく、学生―教員間はもちろん、学科・学年・年齢等を超えた学生同士、あるいは地域の方々との交流を通じて、日々成長する場だと考えています。

以下は、本校が独自に取り組んでいる主な学校行事です。上段に示したそれぞれの学科ごとにまとめた行事日程も含めて、ハーベスト生がどう学んでいるか、その一端を紹介します。

理学療法学科（●は1年生以外も実施）

1年生

入学式／●合同合宿オリエンテーション〈4月〉
●地域貢献事業〈5月〉
●球技大会〈6月〉
教養検定〈7月〉
理学療法実習Ⅰ（1週間）〈8月〉
●ハート育てるハーベスト祭[*1]〈11月〉
ハーベスト杯争奪柔道大会〈12月〉
理学療法実習Ⅱ（1週間）〈2月〉

2年生

理学療法実習Ⅲ（1週間）〈8月〉
臨床実習Ⅰ（3週間）〈1月〉
国家試験対策開始〈3月〉

3年生

臨床実習Ⅱ（3週間）〈4月〉
臨床実習Ⅲ（8週間）〈6月〉
臨床実習Ⅳ（8週間）／卒業論文準備／就職活動開始〈8月〉
卒業論文研究発表／国家試験直前対策開始〈10月〉
理学療法士国家試験／卒業試験〈2月〉
卒業式・謝恩会〈3月〉

介護福祉学科（●は1年生以外も実施）

1年生

入学式／●合同合宿オリエンテーション／校外学習（車いす体験）〈4月〉
高齢者体験実習（移動介助実習）／ベッドメーキング検定／●地域貢献事業〈5月〉
●球技大会〈6月〉
教養検定（初級）／ライフケア検定（フィジカル）〈7月〉
実習Ⅰ―①（3日間）〈8月〉
実習Ⅰ―②③（16日間）〈9月〉
●ハート育てるハーベスト祭／聴覚障害者手話交流会〈11月〉
実習Ⅰ―④（10日間）〈12月〉
介護ブックトーク施設実習／教養検定（中級）〈1月〉
後期試験（全国統一模試）／ライフケア検定（メンタル）／実習Ⅰ―⑤（3日間）〈2月〉

2年生

就職活動開始〈5月〉
介護ブックトーク施設実習〈7月〉
実習Ⅱ（30日間）〈8月〉
卒業技術技能検定〈1月〉
事例研究発表／卒業試験〈2月〉
実践発表会（シルバーリトミック・介護ブックトーク）／卒業式・謝恩会〈3月〉

*1：理学療法学科1年生もメディカルスタッフのアシスタントとして参加し、選手への対応や適切な処置などを学んでいる。

すべての「絆」の始まり――合同合宿オリエンテーション

入学式から3週間後の土日、1泊2日で行われる合同合宿オリエンテーションは、学年を超えて全学科の学生（理学療法学科3年生は除く）が参加し、交流を図るイベントです。

本校の校風を十分に理解し、それぞれの専門職像を確立することを通じて、学ぶ意欲を醸成するとともに、ハーベスト生としての自覚と誇りを身につけることを目的としています。同期同士、上級生と下級生、あるいは学生と教員が寝食を共にし、グループディスカッションやミニ運動会など、さまざまな課題に挑戦するなかで、お互いを知り合うきっかけとなっています。

また、学科を超えた交流は、〝チーム医療・福祉〟の時代にあって、ひとりの対象者をみんなで支えるチームワークの大切さを教えてくれるほか、自分の行動が相手にどう響くのかを考えさせられる学生も少なくないようです。

共に汗を流す――球技大会

毎年6月に開催される球技大会は、学生たちの希望から生まれたもので、すべて学生主体で進行されます。球技はバスケットボール、バレーボール、ドッヂビー（フレスビーを使ったドッジボール）の3種類。300名以上の学生が一堂に会し、各学年の学科・クラスによって分けられた15～20のチームで優勝が争われます。

一緒に参加する教員も少なくなく、学生のなかからは「○○先生、意外に俊足だね」「△△先生、大人気ないなあ」といった声も。仲間と協力し合いながら夢中でボールやフレスビーを追いかけ、思いきり汗を流した経験は、多くの学生の心に強く残るようで、「学生生活の思い出のひとつ」に挙げる卒業生も少なくありません。

リトミック保育学科（●は1年生以外も実施）

1年生

入学式／●合同合宿オリエンテーション／自然保育（校外学習）[*2]〈4月〉
地域貢献事業〈5月〉
●球技大会／卒業生交流会／ピアノ検定〈6月〉
七夕会／教養検定（初級）〈7月〉
岡本ハーベスト保育園観察実習（1日）〈8月〉
保育実習・施設実習Ⅰ—①（2週間）〈9月〉
岡本ハーベスト保育園運動会／教養検定（上級）〈10月〉
●ハート育てるハーベスト祭／ピアノ検定／岡本ハーベスト保育園作品展〈11月〉
ストーリーテリング発表会〈1月〉
保育実習・施設実習Ⅰ—②（2週間）／卒業生懇談会／ピアノ進級検定／教養検定（中級）〈2月〉

2年生

保育実習・施設実習Ⅰ—③（2週間）〈5月〉
就職活動開始〈6月〉
保育実習・施設実習Ⅱ（2週間）〈9月〉
エプロンシアター発表会〈1月〉
ストーリーテリング発表会／ピアノ卒業検定／卒業試験〈2月〉
卒業式・謝恩会〈3月〉

＊2：校外学習として、自然保育（4・12月）、ストーリーテリング（5・6・7・10月）、リトミック（6月）が行われる。

医薬健康学科（●は1年生以外も実施）

1年生

入学式／●合同合宿オリエンテーション〈4月〉
●地域貢献事業〈5月〉
●球技大会〈6月〉
実務実習開始（デュアルシステム：～2年生7月）／教養検定（初級）〈7月〉
実務実習Ⅰ〈8月〉
登録販売者模擬試験／実習Ⅰ認定試験〈9月〉
実務実習Ⅱ〈10月〉
●ハート育てるハーベスト祭／調剤事務管理士認定試験〈11月〉
実習Ⅱ認定試験〈12月〉
実務実習Ⅲ〈1月〉
販売士3級検定試験／企業説明会〈2月〉
教養検定（中級）／実習Ⅲ認定試験〈3月〉

2年生

実務実習Ⅳ〈4月〉
第一回模擬試験[*3]〈6月〉
国家試験直前補習／登録販売者資格試験開始〈8月〉
就職活動開始／教養検定（上級）〈12月〉
医療事務管理士認定試験〈1月〉
OSCE（接客実務試験）／ビューティケアアドバイザー認定試験／POP広告クリエイター技能審査／卒業試験〈2月〉
卒業式・謝恩会〈3月〉

＊3：第二回模擬試験を6月、第三回模擬試験を7月にそれぞれ実施する。

「おもてなし」の凝縮——ハート育てるハーベスト祭

学生たちの日頃の学習成果を披露し、地域社会との交流を図る場として位置づけているのが、本校の学園祭「ハート育てるハーベスト祭」です。『こころ』を育む教育——その『豊かな稔り』（＝HARVEST）を感じてほしい」という基本コンセプトのもと、研究発表・バザー・作品展・実技実演などが学生主体で行われます。

相手を想う。相手が喜ぶ。その喜ぶ姿を見て、自分も幸せを感じる。そこに、こころの「絆」が生まれる——本校の学園祭では、短い出会いのその一瞬に、こころの「絆」を結びたい、という想いが込められています。そして、すべてのイベント・アトラクション・発表は、学生一人ひとりが、大切な人（＝来場者）を「おもてなし」で迎えます。日常行われている教育の成果が凝縮された1日、それが本校の学園祭です。

地域との触れ合い——地域貢献事業

各学科の特徴を活かして、地域の方々に参加いただけるイベントを開催しています。いずれも、学生が主体的に運営しており、日々の学習のなかで身につけた成果を還元することにより、地域社会に少しでも貢献したい、という願いが込められています。

（各学科とも、上記行事日程にある5月のほか、8・10月にも地域貢献事業を実施します。）

「健康ハーベストルーム」（理学療法学科）

最新の体成分分析装置「InBody」を使って、身体バランスや身体強度などを測定し、健康チェックを行います。また、例えば、「腰痛との上手な付き合い方」を学んだ後、腰痛を防止するための体操を体験していただくなど、地域の方々にとって身近なテーマを取り上げ、健康維持への貢献をめざしています。

「癒しのハーベストルーム」（介護福祉学科）

「季節の花を使ったフラワーアレンジメント」「男の料理教室」「お茶と播磨のお話し読み語り」「夏休み介護体験教室」といったテーマのもと、地域の方々とのコミュニケーションを図る機会を設けています。また、近隣の障がい者施設の利用者やスタッフを招いて「クリスマス会」などのイベントも企画。学生たちは何日も前から準備し、最高のホスピタリティでおもてなしします。

「子どもハーベストルーム」（リトミック保育学科）

0～5歳児の子どもたちとその保護者を対象に、リトミック、ストーリーテリング（絵本の読み聞かせ）、伝統行事に関連した製作あそびなど、さまざまな企画イベントを定期的に開催しています。例えば、七夕の近くには、織姫様と彦星様の絵本を読んだり、七夕飾りを製作したりして、楽しい時間を過ごします。

資料編――7年間の足跡

ハーベスト医療福祉専門学校は、今年度で開校から7年目を迎えました。4学科の先にあるそれぞれの分野を導くことのできる人材を育てること、教育を通じて本校の信じる思いを実践すること、地域の皆様とのあいだに豊かな関係を築くことをめざして、さまざまな試行錯誤を繰り返しました。本校の沿革は、その足跡です。

2008年4月
理学療法学科（昼・夜間部）、介護福祉学科、保育学科の3学科でスタート
野田昌義、校長に就任

2008年5月
開校記念高座（落語会）を開催

2008年11月
第1回ハート育てるハーベスト祭を開催

2008年12月
本校の建築デザイン（設計：岩田章吾氏）が2008年「日本サインデザイン・第42回SDA賞」に入選

2009年3月
第1回「ハーベスト杯争奪しらさぎ高等学校柔道大会」を姫路柔道協会と共催

2009年4月
保育学科をリトミック・チャイルド学科に名称変更

2009年11月
本校校舎が「第8回姫路市都市景観賞」受賞

2010年4月
摺河祐彦、校長に就任

2011年4月
医薬学科開設、4学科となる

2011年8月
この年から兵庫県の指定で「認知症介護実践者（実践リーダー）研修」を開催

2012年4月
藤田暢明、校長に就任

2013年4月
リトミック・チャイルド学科を保育学科に名称変更

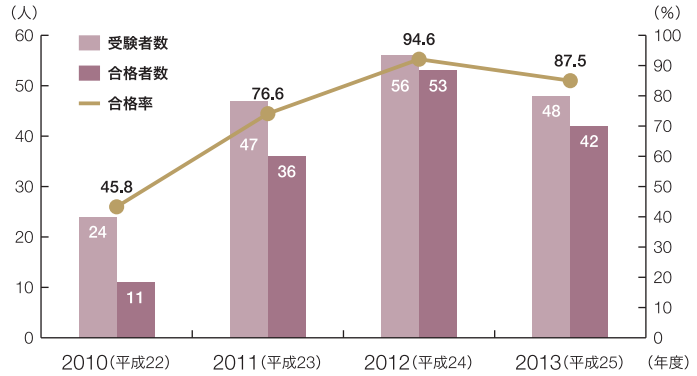
2013年5月
第1回「ハーベスト杯争奪しらさぎ中学校柔道大会」を姫路柔道協会と共催

2013年12月
本校校舎が兵庫県「人間サイズのまちづくり賞」奨励賞を受賞

2014年4月
文部科学省「職業実践専門課程」の認定を受ける
学園長杉本健三が校長を兼務
医薬学科を医薬健康学科に名称変更

■ 理学療法士国家試験（受験者数・合格者数・合格率）の推移

［全体］

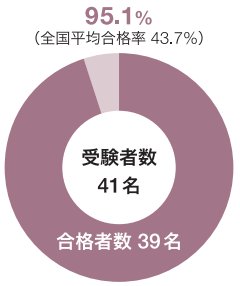


※当該期間における全国平均合格率は、2010年度74.3%、2011年度82.4%、2012年度88.6%、2013年度83.7%である。

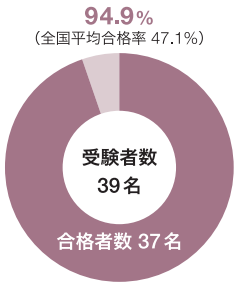
［新卒・既卒別］

	新卒			既卒		
	受験者数	合格者数	合格率（%）	受験者数	合格者数	合格率（%）
2010（平成22）年度　2011.3実施	24	11	45.8	—	—	—
2011（平成23）年度　2012.3実施	35	28	80	12	8	66.7
2012（平成24）年度　2013.3実施	45	44	97.8	11	9	91.8
2013（平成25）年度　2014.3実施	46	41	89.1	2	1	50

■ 登録販売者国家試験（合格率）の推移

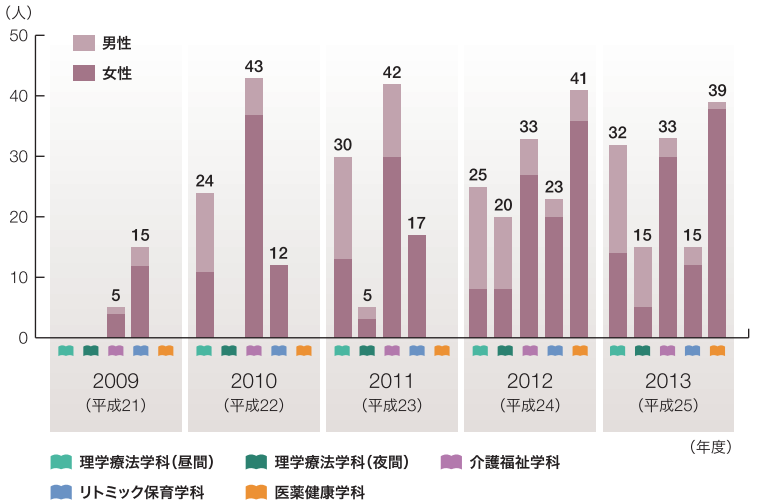


2012（平成24）年度



2013（平成25）年度

■ 卒業者数の推移



	2009（平成21）年度			2010（平成22）年度			2011（平成23）年度			2012（平成24）年度			2013（平成25）年度		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
理学療法学科（昼間）	—	—	—	13	11	24	17	13	30	17	8	25	18	14	32
理学療法学科（夜間）	—	—	—	—	—	—	2	3	5	12	8	20	10	5	15
介護福祉学科	1	4	5	6	37	43	12	30	42	6	27	33	3	30	33
リトミック保育学科	3	12	15	0	12	12	0	17	17	3	20	23	3	12	15
医薬健康学科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	36	41	1	38	39
全学科合計	4	16	20	19	60	79	31	63	94	43	99	142	35	99	134

CONCEPT BOOK

THE HEART OF HARVEST

平成 26 年 5 月発刊

発行者　学校法人摺河学園 ハーベスト医療福祉専門学校
〒 670-0962　兵庫県姫路市南駅前町 91-6
TEL. 079-224-1777（代）

表紙絵　奥田善巳

装丁・デザイン　齋藤 康
編集協力　株式会社アピックス
制作協力　ドルフィン

印刷・製本　日本ハイコム株式会社

© 学校法人摺河学園 ハーベスト医療福祉専門学校 2014 Printed in Japan